

ほかに当時フランスで発行されていた『商業新報』(Gazette du commerce, 1763-83)からも情報を集めている。しかしこの編集者が最も依存したのは『経済雑誌』であった。彼は読者に対してしきりに情報記事や論説を送るように訴えているが、それらはあまり集まらなかったらしい。この雑誌の後半の諸号、とくに終刊にちかい諸号が盛んに『経済雑誌』に掲載される翻訳家パンジュロン(Pingeron)の翻訳新刊の紹介の紹介にあてられているのは、彼がしだいに『経済雑誌』からの無断転載に頼らざるをえなくなっていたためであろう。経済学の新刊紹介についても、彼は大いに『経済雑誌』に依存していたのである。予約購読者からの投稿に期待する編集と経営はやがて困難となったのであろう。彼は10月半ばには、もう現在の雑誌の発行を年内に打切って、新しい雑誌を発行することを読者に告げている。新しい雑誌は『科学・技術・産業・海運・商業の歴史雑誌』(Journal historique, des sciences, des arts, de l'industrie, de la navigation, et du commerce)と予告されていたが、この新しい雑誌が発行された形跡はない。現在どこにも所蔵されていない。しかしまたある日突然としてこの雑誌の情報が舞いこむことがあるかもしれないし、あるいはまたこの雑誌にどこかで行き会うかもしれない、と私はかすかに期待している。

(一橋大学経済研究所教授)

書誌の写し出すジョン・ロックの姿

松田芳郎

1. 思想史研究への計量書誌学的手法の適用の可能性

話し言葉の世界から書き言葉の世界に移った後の思想研究は、考古学的研究または文化人類学的研究の手法から歴史研究の方法へと姿を変えたと思われている。けれども書き言葉の世界は長い写本の時代があり、印刷物が作られるようになってから、思想自体の変容の様相も大きな変化を受ける様になった。アイゼンシュタインはその近著 *The Printing Revolution in Early Modern Europe*, Cambridge, 1983 (エリザベス・アイゼンシュタイン, 別宮貞徳監訳、『印刷革命』みすず書房、昭和62年)を「認められざる革命」という章から始めて印刷術を一つの革命であるという表現をとっている。この印刷された物があって、思想史研究が深化することは、思想史研究が、ある人の伝記的歴史分析から始まったとしても、結局の所その人の書いた書物の分析に帰着せざるを得ないことから窺える。従って思想史研究が、書誌学と不即不離で発達したことも事実である。特にフェーヴルの *L'Apparition du livre*, Paris, 1958(ルフェーヴル、関根素子ほか訳『書物の出現』筑摩書房)などを通じて、社会史的視角から書誌学自体を見直す動きは、思想史研究の発展に新しい光をあてるようになった。他方書誌学乃至図書館学 library science では、書誌情報を計算機可読型データにすることによって、その統計解析によって科学史研究に、新しい分析方法 bibliometrics (計量書誌学と訳されることが多い)を導入することになった。この分析手法は、大別して、(1)出版物、特に雑誌論文の刊行状況の統計解析と、(2)引用分析(citation analysis)と、(3)語彙分析による本文解析に大別することが出来る。もともと(3)は、これ迄も、文学研究などで手作業で行われてきたことの深化であるとみる事が出来る。

計量書誌学的手法の思想史研究への導入の試みは、われわれ自身が幾つか公けにしているが(鈴木亮(編)『経済理論史を中心とした機械可読書誌編纂の技法の研究及びデータベースの作成：計量的学説史のための文献情報データベースの研究』(昭和51・52年度文部省科学研究費報告書)、佐藤茂行(編)『ヨーロッパ社会運動史全体像把握のための書誌情報の計量化』(昭和55-57年度文部省科学研究費報告書)。古瀬大六・松田芳郎(共編)『社会科学分野におけるデータのデータ構造の分析』(昭和55-57年度文部省科学研究費報告書)、十分な成功を収めたとはいいがたい。ただ、そこでの実験結果を整理して問題点を検討してみる。

2. 利用可能なデータの現状

書誌情報の計量的分析を通じて明らかにしうることは多くあるであろうが、先に分類した(1)の刊行物の量的分析を通じて、最も適切に解明出来ることは、思想史上の人物が、どのような思想を生み出していったか、あるいは、現代の時点に立ってみて、どの様な意味を持った思想であるかを解明するのではなく、その思想の時代に、あるいは、その次の時代にどの様なものとして理解されていったかである。即ち、誰にどれだけ読まれたかである。

誰れにどれだけ読まれたかという、刊行物の量的把握は、難しい。科学史、あるいは科学の現状把握のために活用されている計量書誌学的分析は、不特定多数によって読まれる文献ではなく、専門家のみの読む現行の学術雑誌等の収録論文をデータとしている。これに対して、社会思想史または広く社会科学の文献は、不特定多数の人々によって読まれて社会的力となるような文献が対象である。従って、現実には、何部印刷された内、何部実際に売れ、売れたものは何人の間で廻し読みされたかが重要である。歴史的には極めて重要な文献が初版時に何程も売れなかったという例は枚挙にいとまがない。また、現存率は、その時点の評価(多数部数が売れる)ではなく、その後の歴史的評価に基づいて図書館等で保存されるわけであるから、遡及的に検討すると、その刊行時点ではなく、後の時代の評価によって決められがちである。

ただ、実際の解法としては、一国の総合目録(union catalogueとって、一国内の各種図書館の目録を統合してものを指す)は、かなりのところ読まれた本の目録という性格を持っていると解釈出来る。何故ならば、ヨーロッパ社会であるならば、1830年代頃迄は、識字率に制約されて、一冊の書物が大量に印刷されて多くの人に読まれることは稀であった(拙稿『百科全書』とその遺産——18・19世紀の社会運動とその出版活動の計量化の試み』(佐藤(編)前掲書収録))だけでなく、当時の印刷技術では、一回の刷り部数は多くて、3~4千であり、刊行部数は、版次の増加にはほぼ反映しているとみることが出来る。また図書館がその活動を合理化し、選書して不要のものを破棄する(weeding 雑草どりと呼ばれている)ようになったのは、20世紀近年に入ってからであり、19世紀前半の資料は、どちらかという保存の対象とされることが多い。従って、総合目録上での所蔵箇所が多いことは、むしろ刷り部数の大小を測定する代理変数とみることが出来る。注意すべきことは、第1に、総合目録は、あくまでも、出版物総量を把握するといった集計量(マクロ・データ)であって、個々の著作家の著作物の網羅的なデータすなわちマイクロ・データとしては十分ではないことである。マイクロ・データとしては、著作者個人別の人物書誌(bibliography)を使用しなければならない。第2に、その様に利用上では問題点があるだけでなく、実際にその様な遡及的書誌として利用可能な総合目録としては、北米諸国の*National Union Catalog*が、冊子体として利用可能であるに過ぎない。イギリスについては、British Libraryに当るBritish Museumの*Catalog of Printed Books*が、フランスについては、*Catalogue général des livres imprimés de la Bibliothèque*

*nationale*という中央図書館の目録があるに留り、それでさえも、全体を計算機可読型目録として整備した国はない。

この様な状況の打開は二つの方向からなされている。一つは、ESTCプロジェクト (*Eighteenth century Short Title Catalogue* の新版を計算機可読型目録として編成する事業である。拙稿「BLAISEに乗ったESTC」[「一橋大学社会科学古典資料センター年報」3号、昭和58年参照] であり、いまひとつは、OCLCにみられるように、複数の大学図書館等が自館の蔵書目録の計算機可読化を共通のデータベースを媒介に行うことによって、一種の総合的目録を編成する方式である。(この事業には、多くの紹介があるので、ここでは省略する。) ただ、ESTC データベースは、まだオン・ライン検索の段階であり、そのファイル自体を外部提供することは認めていないので、その内容を自由に統計解析することは出来ないし、またそれだけでなく、18世紀は確かに輝ける世紀であるが、ここでの統計解析のような目的には、むしろ19世紀のデータが重要である。従って、このデータベースの解析だけでは十分とはいわれない。また OCLC データベースは、逆に、すでにあまりにも膨大になっており、実証すべき命題が特定化されているのでなければ利用するには不向きである。この計量書誌学的分析は基礎的な情報のデータ化とその整理の段階でなされなければならないことが山積している。

3. ロック著作の刊行状況

これ迄われわれの分析用データの一つとして使用してきたものに、ハーヴァード大学中央図書館(ワイドナー図書館)の書架目録がある。これは1976年以前受入れの文献の目録であり、簡略記載の目録の機械可読化である。これ以降はLCのUSMARCの方式に準拠して別整理になっている。ただし、われわれの使用しているのは、このなかの人文・社会科学分野の1463-1976間の約67万点のデータである。このデータの一次解析の結果は、先に『書誌情報データベースによるヨーロッパ社会科学・社会思想形成過程指標集成 (BASS データベース解析結果書)』(松井幸子編、昭和56年刊)としてまとめた。いかに大きな図書館であるとはいえ、一つの図書館の目録に依拠している以上、様々な偏りがあることは当然である。その偏りの度合いが明らかになるならば、このマクロ・データの示すものが何であるかを逆に照射することが出来る。そのためには、特定の著者についてその著作がどの程度収録されているかというマイクロ・データによる検証が有効であると思われる。アダム・スミスについての検討はその一例である。ここでは、アティグによって編成されたジョン・ロックの書誌(John C. Attig (comp.) *The Works of John Locke; A comprehensive bibliography from the seventeenth century to the present*. Westport & London, 1985. (Bibliographies and Indexes in Philosophy, No.1)) を使用してその点を検討してみる。

周知の様に、ジョン・ロックの書誌学的研究は、二つの書誌の刊行によって、大きな進歩をとげた。一つは、ここで言及したアティグの仕事であり、いまひとつは、ハリソンとラスレットによるロック蔵書目録の復元である(John Harrison & Peter Laslett, *The Library of John Locke*, Oxford, 1965)。これによって、ロックがアルジャーノン・シドニー『政府論』(1698) やロジャー・ジョーンズの『自己防衛論』(Lamphilus Misotyrannus, *Mene Tekel*, 1663) を読んでいたかどうかといった問題については、消極的結論——確かな反証が提出されるまではという限定付とはいえ、少なくとも、ロックはその本を持ってはいなかった——を下すことが出来た。この蔵書目録の詳細な分析は、ラスレット自身の同書に付した序論での若干の統計解析を除くとまだ十分なされていないが、引用分析の手法の変形として活用することが可能であり、大きな材料がロック研究者の手中に残されたといえる。

表1. ワイドナー図書館書架リストによるロックの著作刊行状況

--- PUBLICATION DATE SPAN OF MAJOR AUTHORS' WORKS IN EDUCATION ---
- HARVARD UNIVERSITY WIDENER LIBRARY SHELF LIST: EDUC -

AUTHOR	VOLS	PD-S	PD-L	SPN	ND	H	D	0	10	20	30	40	50	60	70	80	90	100	10	20	30	40	50	60	70	80	90	200	10	20	30	40	50	60	70
LOCKE J	13	1693-1964	271	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	1

--- PUBLICATION DATE SPAN OF MAJOR AUTHORS' WORKS IN PHIL&PSY ---
- HARVARD UNIVERSITY WIDENER LIBRARY SHELF LIST: PHIL -

AUTHOR	VOLS	PD-S	PD-L	SPN	ND	H	D	0	10	20	30	40	50	60	70	80	90	100	10	20	30	40	50	60	70	80	90	200	10	20	30	40	50	60	70
LOCKE J	144	1659-1957	322	3	1	2	1	.	.	1	14	11	4	6	3	9	4	2	1	1	8	6	5	12	5	1	1	.	5	2	5	2	4	25	

--- PUBLICATION DATE SPAN OF MAJOR AUTHORS' WORKS IN GOV & LAW ---
- HARVARD UNIVERSITY WIDENER LIBRARY SHELF LIST: GOV -

AUTHOR	VOLS	PD-S	PD-L	SPN	ND	H	D	0	10	20	30	40	50	60	70	80	90	100	10	20	30	40	50	60	70	80	90	200	10	20	30	40	50	60	70		
LOCKE J	14	1694-1967	273	1	1	1	1	2	3	3
FILMER R	2	1652-1949	297	1	1	

(注) VOLS: 表にあらわれた冊数計 SPN: PD-SとPD-Lの間の期間
 PD-S: 最初の文献の刊年 ND: 刊年不詳
 PD-L: 最後の文献の刊年
 期間区分: 最初の文献の刊年から10年毎の区分

表2. ロックの著作刊行状況

刊年	1650	60	70	80	90	1700	10	20	30	40	50	60	70	80	90
ワイドナー統計	1	-	-	3	16	12	4	6	3	9	4	2	2	1	8
アティグ点数A	3	1	5	21	8	4	8	8	2	9	9	10	2	10	13
アティグ点数B			3	5	6	5	8	6	11	10	2	5	8	11	6
						1800	10	20	30	40	50	60	70		
ワイドナー統計						6	8	13	6	1	1	-	-		
アティグ点数A						16	19	5	9	10	6	12	5		
アティグ点数B						1	4	2	1	1	3	3	-		

(注) (1)アティグ点数 A 英語・ラテン語文献数 (除著作集)
 B 英語・ラテン語以外のヨーロッパ系言語 (除著作集)
 (2)刊年はワイドナー統計については、集計表(表1)の再加工であるので、10年刻みと正確には対応しない

ここでは、ロックがどの様に、同時代者にまたは、その後の世代に読まれたかという指標として、ワイドナー・ファイルから抽出された刊行点数をみると、表1の様になる。ロックの政治思想が、思想史の大枠のなかで18世紀中に読まれ、教育思想としてはむしろ19世紀に入ってから読まれている様にみえる。ただアティグの書誌によると *Some Thoughts concerning Education* (1693) は、18世紀中たびたび版を重ねている。書架目録での分類格付には、問題がありうることを考慮に入れて、ワイドナー統計とアティグの書誌の点数を対比すると表2が得られる。ただし、アティグの数字は、筆者の手集計であり区分まちがえや、どの版本は算入するかという点で若干の不確かさがある。これを図示したものが、図1である。

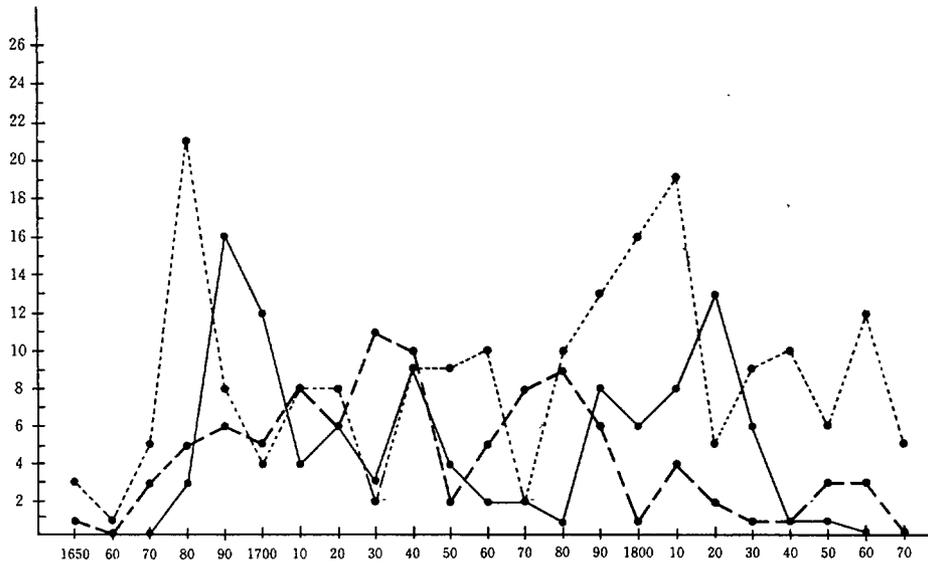


図1. ロック著作刊行点数対応図 (凡例) —: ワイドナー統計
 ----: アティグ点数A (英・ラテン)
 - - : アティグ点数B (その他ヨーロッパ系言語)

19世紀中葉以降の印刷技術の大幅な進歩をみる以前は、およそその傾向としては、両者の動きは一致しているとみることが出来る。アメリカの独立宣言(1776)を媒介として、フランス革命の人権宣言へと流れていくロックの思想のヨーロッパ社会での伝播の状況を示したものである。これに対してフィルマーがどのようにして刊行されたかをワイドナー統計でみると、表1の下欄にある様に、まさに、思想史的研究の対象としての現代に入ってから復権であることがみてとれる。とするならば、マクロの動向指標としては、このような蔵書目録に依拠した刊行統計は、それなりの有効性をもっていると推定出来る。従って残された課題は、マクロ統計量の有効性をマイクロデータとの照合によって確認しながら、マクロ統計によってのみ描き出せる社会思想の大きな潮流の動向を、今日の目ではなく、それぞれの時点の目で再構成してみることにあるといえよう。

(一橋大学経済研究所教授)